

111 学年度第一学期ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座 (15)
テーマ：東アジアにおける古典と音楽

中国文化大学 111 学年度ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座の第 15 回目は本学日本語文学系教授の齋藤正志先生による「東アジアにおける古典と音楽」と題する講演であった。講演の冒頭では東アジアにおける古典と音楽は明らかに密接な関係にあると述べ、その点を確認してから、具体的な日本古典文学の作品に言及する。

そこで先ず古代の日本について概観した。『漢書』や『後漢書』、『魏志』その他の古代中国文献に当時の日本に関する記録がある。特に『魏志』倭人伝では女王卑弥呼に関する記述が有名である。また、先行研究に基づけば延暦年間と承和年間に派遣された遣唐使は中国音楽の摂取を目的としていたという。さらに、初代から第 82 代までの天皇について言及し、その諡号を以て実在しなかった天皇や女性の天皇について述べた。続いて 3 度の遷都と歴史書・文学書との関係や様々な文学ジャンルについて言及してから、古代の貴族の生活について簡単に触れた上で、恋は男性の手紙で始まり、女性は受動的言動しかできなかつたと述べた。

次に先行研究に基づいて、七絃琴が孔子以来の文人から特別視されていたことを述べて、隋代・唐代の墓から発掘された弹琴する人形の写真を先行研究の中から示し、七絃琴が膝に乗るほど小さな楽器であることを指摘した。そして『礼記』によって、音楽は天と地を仲良くさせるものであり、「金石絲竹」は音楽の器、すなわち楽器となるものであることを確認した。これが儒教における礼楽思想の根幹をなすものだとして先行研究によって述べた。古代中国での礼楽思想は日本の天皇によって継承され、その一例が当時 28 歳で女性皇太子だった阿倍内親王による五節田舞である。この舞は父帝の第 45 代聖武天皇の指示によるものであり、礼楽思想継承の具現化ということになる。

また、第 54 代仁明天皇は父帝である淳和天皇の四十賀を祝って琴を弾き、仁明天皇の皇太子だった道康親王（後の第 55 代文徳天皇）も父帝の四十賀を祝って七絃琴を献上している。先行研究によれば、皇太子が七絃琴を演奏したり、父帝に七絃琴を献上したりしたのは次期天皇に相応しい存在であることを主張す

る目的だったと推察されるという。

さらに、七絃琴は『史記』で司馬相如と卓文君の恋も演出し、この恋物語を継承した日本の古代文学『宇津保（うつほ）物語』では第一巻「俊蔭」で俊蔭の娘が七絃琴を演奏し、貴族の子息が彼女に魅せられて一夜を共にする話となっている。

さて、『うつほ物語』に先行する『竹取物語』は養父である竹取の翁の主張、すなわち人間ではない特殊な存在であっても女性である以上は結婚するべきだ、という主張に対して、本気で自分を愛すると判断できない男との結婚はできないと反論する養女のかぐや姫が自分への愛情を確認するために 5 人の求婚者に難題を課す。その結果、求婚者たちは全員失敗し、天皇もまた彼女を手に入れようとするが、彼女は眩しく光って姿を消してしまったので、天皇もまた敗退し、結局、彼女は地上で結婚することなく月の都に帰還した、という話である。

前述のように古代貴族の現実社会では男性から手紙が届き、それに返事することで恋がスタートし、結婚に至るという経緯で、女性は受動的言動を余儀なくされた。だが、『竹取物語』では、かぐや姫は養父の主張を退け、自らの主張と能力によって結婚を拒絶する。また、『うつほ物語』では『史記』とは異なり、男性ではなく女性が七絃琴を演奏して一夜の恋が成立する。つまり、虚構世界では男性よりも女性のほうが恋を主導しているのである。さらに前述のように女性皇太子だった阿倍内親王は父帝から礼楽思想を継承するために五節田舞を舞った。史実によれば彼女は二度目の天皇に即位した時、弓削道鏡に皇位を譲ろうとしたという。したがって虚構の物語でも歴史の事実でも女性は男性を凌駕する可能性を持っていたのではないだろうか、と結論した。

（ウェブサイト：<https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>）

（日本語原文：齋藤正志 日文系教授）